Ⅱ　重点項目別の成果と課題

使命１　　**地域の人びとと地域活性化に取り組み、ともに成長するミュージアム**

基本方針	活動目標	重点項目	成果の概要	課題及び改善への取り組み
県民との協働や地域活性化への貢献	地域や県民などとの協働	１．地域の文化資源の掘り起こし・磨き上げ・活用	（１）地域にある文化資源の把握、掘り起こし状況 【本館】 ①多度津町 合田邸 邸内所在の民俗生活資料・文書記録資料の概要把握 年間4日間（月1回程度1～3名）　継続中 合田邸ファンクラブとともに取り組んだ。 合田家が所用していた品などの状況が把握されつつあり、今後の活用への準備を進めている。 ②観音寺市 安藤家資料 江戸時代の庄屋・大庄屋を勤めた植田村の安藤家に伝来する生活道具・書画類、文書記録資料の概要把握・調査 年間5日間（月1回程度1～3名程度）　継続 地元公民館で、地域の協力者や有志とともに活動 ③高松市 最明寺資料 特別展「語る武具」に係る同寺所蔵の甲冑調査を契機に、書画類についても調査を実施した 年間3日間（のべ12名） 調査の成果を地域と共有する試みとして、同寺で甲冑と仏画数点を公開 【歴民】 ①地域民俗調査の実施 少子高齢化が進む地域社会(館近郊)の地域民俗調査を実施記録化や地域活性化に資する(継続)。 ・高松市亀水町聞き取り・民俗行事確認調査 8回実施(継続) ・坂出市王越町地域民俗調査予備調査(含自然分野依頼) 3回実施(継続) ②コロナ禍の秋祭り実態調査の実施 県内約20ヵ所	・県内の地域文化資源については、まだまだ把握が十分でなく、一層拡充する必要がある。 ・継続的に調査を実施し、一定期間で成果を公表できるように、中長期計画を策定する必要がある。 ・調査成果や知見の地域との共有化の方法について、具体的に取り組みながら検討をしていく。 ・歴史・民俗両面からのアプローチを検討するとともに、コロナ禍での対面調査のあり方等も模索していく必要がある。 ・今後は既存の地域の団体と連携し、掘り起こしや磨き上げ、活用を行っていく必要がある。 ・近い将来想定される、コロナ禍等の影響により継続が困難になる祭りや民俗芸能の存続の危機への警鐘や対策に資する必要がある。
			（２）地域の人びととのつながりと協働 ・ミュージアム・ボランティア活動 全体活動 登録人数81名（令和2年度新規応募6名） 新型コロナウイルス感染症対策として全体会を中止し、各グループの活動も縮小した（展示解説は休止） 活動報告展示・新規ボランティア募集（延期）	・高校生や大学生への周知や、学生が参加しやすい活動内容等について検討を進める。 ・コロナ禍での活動のあり方について検討を進め、試行していく。

			グループ別活動 解説　年間9回（定例会・勉強会） ギャラリー・トーク　年間10日（定例会・勉強会） 普及　自主運営ワークショップ　年間1回実施 資料整理　チラシ・図書整理等　年間16日、のべ57名 瀬戸内海歴史民俗資料館　年間152回、のべ192名 （展示案内・資料整理・館外調査・館行事補助他・環境整備）	
			（３）文化資源の活用とそれを担う人材について 【本館】 ・香川県中学校美術教育研究会と連携し、かがわ未来のアーティスト育成事業を実施した。坂出市教育委員会や讃州甲冑会の協力を得て創作甲冑を制作し、ロビーでの展示を行った。 展示期間（R3.1.2～1.30） Web研修・会議や、展示品解説の動画配信など、コロナ禍でも活動できるよう工夫した。 【歴民】 ・文化資源の調査や保存を推進する地域の文化財保護審議会や民俗芸能団体、観光関係者、高校生等に地域資源の活用のための講演・研修を行った。8回167人。	・中学生が香川の文化に触れ、ミュージアムとも接点を持つ機会になることから、今後も連携を継続していく。 ・リモート開催やウェブセミナーにも対応できるよう素材の準備やスキルを高める必要がある。
			（４）文化財レスキューなどのネットワークづくりの状況 ・新型コロナウイルス感染症拡大のため、香川県資料館協議会の会議・研修の実施を中止し、情報・意見交換の場を設定することが出来なかった。 ・被災地域への救済資材の援助として、裁断新聞紙の作成・送付を行った。	・関係機関の情報共有の場を定期的に設定する。 ・コロナ禍での資料館協議会の活動について検討する。 ・裁断新聞紙の作成・送付は区切りがついたため、今回の事例を参考に、遠隔地でも可能な被災資料救済の支援方法について検討していく。

使命２　　香川の文化創造に寄与し、豊かな社会を実現する原動力となるミュージアム

基本方針	活動目標	重点項目	成果の概要	課題及び改善への取り組み
文化資源の収集	収蔵品の充実	２．収集方針に沿った能動的収集	（１）収集実績 【本館】 ・野見山暁治作品、神谷宏治氏が設計・見聞した建築等の写真、満濃池絵図等を含む2,598点を収集。 【歴民】 ・民俗資料など718点を収集。 ・雑魚を有効利用した練り製品製造のための蒲鉾型を能動収集し常設展示に組み入れた。また、テーマ展「昭和こども文化展」にあわせて調査展示した資料約100点を能動的に収集した。	・展覧会の開催が新たな資料収集につながった。 ・今後も、収集方針に基づいて、計画的な収集が出来るように努める。 ・既存資料の空白を埋めたり、館のコレクションを充実させるため、能動的な収集を続けていく必要がある。
			（２）新規収集品や預託(収集予定)資料に関する調査研究 【本館】 ・令和元年度に収集した小林萬吾関係書簡や写真の調査を行い、その成果を『ミュージアム調査研究報告』第12号で公表した。 ・藤沢章の取材旅行関係資料を整理し、収蔵手続きを行った。作品制作の背景を知ることができる資料で、整理の過程で得られた成果の一部は常設展で展示・紹介した。 【歴民】 ・預託資料である高橋克夫資料の写真約10万点について、撮影場所や内容について再確認作業を行い約3万5,000点の整理を終え、その一部を所蔵者の了解を得て各テーマ展でも活用した。	・長期間預託の状態が続いている資料群に加え、新規の収蔵依頼もあることから、整理計画を作成し、計画的に収蔵手続きを進めていく必要がある。 ・資料整理の過程で得られた知見を、展示や刊行物等で積極的に発信していく。 ・写真類の再確認作業については、令和3年度も引き続き取り組む。
			（３）既収蔵品に関する調査研究、新たな知見 【本館】 ・館が収蔵する武器・武具類について再調査を行い、その成果を特別展「語る武具」の展示や展覧会図録に反映させた。 ・令和元年度に常設展示に向けて調査・研究を行った館収蔵資料について、『ミュージアム調査研究報告』第12号において紹介を行った。（「水戸御祭礼図」「寛文期高松城下図」） 【歴民】 ・ボランティアや漁業者とともに、収蔵漁網資料の再確認、作図等の調査を継続実施した。 ・収蔵している漁具について、近世～近現代の漁業に関わる遊山、観光資料等を紐解き、「瀬戸内の風景を生み出すもの」として漁具の果たした役割について考察し、テーマ展等で発信した。	・展示を機会とする収蔵品調査を進め、新たに得られた知見の発信を継続する。 ・地域にある文化資源の掘り起こしに関連して、収蔵品の調査を進め、その情報を地域に還元する。 ・ボランティア、漁業者、職員の日程調整が難しく作業の進捗状況に課題がある。 ・展示を機会に収蔵資料の再考察などを進めていく必要がある。

			（４）収蔵品情報の公開 【本館】 ・館のホームページ上で、データベース情報の公開を継続。 【歴民】 ・平成23年度～令和元年度に収蔵した資料を新収蔵資料展として、前・後期に分けて約250点公開した。 ・国重要有形民俗文化財「西日本の背負運搬具(約300点)」のうち約50点を展示する収蔵庫を常時公開することとした。 ・当館職員やボランティアが記録してきた祭礼・民俗芸能関係の2次資料である記録映像を編集し、10番組を常設展示室で公開した。また、鯛ゴチ網や釣り針づくりなどの民俗技術を職員が記録し、ボランティアが編集して公開した。	・新規収蔵資料の館データベースへの登録が遅れている。作業の分担などを行いながら、計画的に進める必要がある。 ・新規収蔵品を公開する機会（新収蔵資料展等）を設ける。 ・新収蔵資料の紹介を3～5年ごとに定期的に開催していく必要がある。 ・定期的な展示資料解説などにより、教育効果を高めていく必要がある。 ・今後もボランティアとの協働により、計画的に記録映像の編集・公開を進めていく必要がある。
自ら主体的に関わる文化芸術活動の推進	芸術と県民をつなぐ	３．創作活動発表の場の提供	（１）香川県美術展覧会応募者数（前年比） 新型コロナウイルス感染症予防の観点から、応募作品の搬入･搬出、審査などにおいて、密集状態を回避することが困難として中止したため、実績数値無し。(2)～(4)についても同様。	
			（２）香川県美術展覧会における若手作家参加件数 ―	
			（３）香川県美術展覧会における若手作家参加促進 ―	
			（４）香川県美術展覧会の実施・運営の改善状況 ―	・秋季にこれまでの県展を振り返る「香川県美術展覧会−これまでの県展と、これからのケンテン ー」を開催。県展にかかわりのある作家の作品や出品者アンケート結果をパネルにまとめて展示した。 ・感染防止対策を講じながらの開催についてさらに検討を進める。 ・審査の透明性をさらに高める方法の検討を継続する。
			（５）貸館機能の促進 【本館】　創作活動発表関係数／総数（前年度実績） 貸館総事業件数　48件（前年度　82件） 利用者数　2,471人（前年度　5,937人） 講堂　635人（前年度　2,309人） 研修室　851人（前年度　2,077人） 【文化会館】　創作活動発表関係数／総数（前年度実績） 貸館総事業件数　32件（前年度　98件） 利用者数　6,917人（前年度　22,618人） 県民ギャラリー　5,721人（前年度　18,970人） 芸能ホール・和室　1,196人（前年度　3,648人）	・特別展関連事業との調整が課題であった。 ・利用者からの問合せは増加しており、優先順位の見極めを徹底し、調整を適切に進め、貸館利用促進につなげたい。 ・利用者からも施設の老朽化を指摘されている。

使命３　　香川の魅力を発信し、感動を呼び起こすミュージアム

基本方針	活動目標	重点項目	成果の概要	課題及び改善への取り組み
香川の魅力を発信し、感動を呼び起こす事業の実施	感動を呼び起こす	４．魅力ある大規模な特別展の開催	（１）入場者数 ①白馬のゆくえ　小林萬吾と日本洋画50年 2,229人（70人/日）　4/11（土）～6/7（日）　32日間 ※4/18(土)～5/8（金）臨時休館 ②語る武具　― ARMOUR & STORIES ― 4,748人（125人/日）　10/24（土）～12/6(日)　38日間	・新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、講演会・ワークショップ・ミュージアムトーク等の関連行事を中止し、代替措置としてＳＮＳによる展覧会の魅力発信に努めたが、配信動画の質や精度も課題であり、視者の満足度を高めるよう取り組みたい。 ・展示作品の理解しやすさや親しみやすさの演出を心がけた一方で、専門的な解説がもっと欲しいという感想もあった。幅広い層の満足を得るため、展覧会の性格に応じて工夫していきたい。
			（２）新たな視点の取り組み ①香川出身で、日本洋画の発展とともに歩んだ洋画家、小林萬吾（1868－1947）の代表作を中心に、彼と交流した画家たちの名作、彼らに影響を与えたフランス近代絵画など130点を一挙紹介した。 ②甲冑や刀剣・火縄銃などの武具を、美術作家 野口哲哉（平成27年度県文化芸術新人賞）の企画協力を得て展示展開した。	・今後も郷土の作家について、その時代背景を踏まえて回顧し、その代表作を紹介する展覧会に取り組む必要がある。 ・観覧者の層を広げるためにも、展覧会の内容に応じて、異分野の視点による企画構成やコラボレーションなどに取り組みたい。
			（３）会期設定 ①春の特別展は、当館を含む３館共同企画の巡回展で、年度の区切りに縛られず準備を進めることができたため、４月の前半からの会期設定とすることができた。 ②コロナ禍において展示資料の調査及び集荷等の準備調整に対応するため、当初予定の夏から秋にかけて設定していた会期［（8/8（土）～9/22（火・祝）］を秋から冬にかけての会期に変更した。	・コロナ禍でなければ、春季は観光客が３月下旬から移動する傾向にあり、春の特別展は４月の中旬までに開展できると効果的である。 ・当初は、高松市美術館で開催予定だった野口哲哉氏の個展に合わせて会期を設定していた。今回は実現できなかったが、今後も近隣の博物館・美術館との連携による相乗効果を考えたい。
			（４）大規模イベントとの連携 ・令和２年度に関しては特になし。	・令和４年度は瀬戸内国際芸術祭との連携を図っていく。
			（５）展示タイトル、キャッチコピーの工夫 ・館内外から意見を聞きながら、各展ともに展示内容を反映した魅力的なタイトル等を設定することを心がけた。	・今後とも、展覧会内容に則した簡潔なタイトル、キャッチコピーを設定し、誘客に努めたい。
			（６）観覧者が自分自身で考えたり感じたり出来るような展示手法等の工夫 ①展示会場の空間を、色分けした仮設壁で効果的に行い、観覧者の理解を助けた。 ②展示照明や展示位置を工夫し、観覧者が間近に展示品を見られるように工夫し、適宜スライドショーなども設置した。	・会場の章だて（コーナ）ごと、メイン作品などにメリハリを付けるため、効果的な仮設造作を今後も活用したい。 ・今後とも、展示テーマに応じて、展示品への関心や理解を促す工夫に努めたい。

			（７）ミュージアム収蔵品の展示への活用状況 ①小林萬吾ほか、藤島武二、猪熊弦一郎の当館の収蔵作品を一挙紹介し、また県外の２会場に巡回させ、当館コレクションの知名度を高めることができた。 ②指定文化財はじめ、質の高い収蔵品を展示活用できた。	・単館の自主企画展のみならず、他館へも巡回できるような特別展の企画に取り組む必要がある。 ・収蔵品を軸とした展示企画を今後も検討していく。
			（８）ミュージアム収蔵品に対する独自の視点や地域に根差した題材を基にした展示企画 ①香川出身の近代洋画家、小林萬吾にスポットをあてて展示を構成した。出身地の三豊市では小林萬吾を学習教材として取り上げるなどの取り組みにも貢献できた。 ②香川県ゆかりの武器・武具類を中心に展示した。	・全国的に知られる優品の展示公開には大きな意義があるが、調査研究に基づく香川ゆかりのテーマや香川独自の視点を含んだ展示構成や企画も重視し、今後もできる限り取り組んでいきたい。
			（９）広報戦略・方法、ＳＮＳやＨＰなどによる情報発信の状況 ・Ｔｗｉｔｔｅｒ・ＹｏｕＴｕｂｅなどのＳＮＳを活用して、展示解説等の動画を配信し、新型コロナウイルスの感染症予防と同時に展覧会の魅力発信を行うなど、新たなサービスを試行した。	・ＴｗｉｔｔｅｒやＦａｃｅｂｏｏｋ、ＹｏｕＴｕｂｅを積極的に利用した。ＳＮＳの利用は、新型コロナウイルスの感染拡大という予想外の事態に対し、来館が困難な方たちへの対応としても有効な手段であり、今後も継続してＳＮＳによる情報発信に努めたい。なお、動画制作は職員によるものが主であり、見やすさや分かりやすさに配慮し、その質を高めることも課題である。
	収蔵品により香川の魅力を呼び起こす	５．常設展示における収蔵品の活用	（１）常設展示の回数と入場者数（前年比） 16回　16,647人（13回　51,492人）	・新型コロナウイルス感染症の拡大による臨時休館、ミュージアムトーク等のイベントの中止の影響、再開後も外出を控える傾向が続き、前年比で大幅に減少した。
			（２）テーマ設定 ・文化財保護法制定70周年企画として４本のテーマ企画を行い、国宝「藤原佐理筆詩懐紙」（当館蔵）、重要文化財「木造倭迹々日百襲姫命坐像」（国有、当館保管）などを展示公開した。た。 ・特別展開催計画の変更に伴い「砂との出逢い　藤沢章―中東アラブの光のもとで」を臨時開催し、館蔵絵画作品と関連資料を展示した。 ・美術作品は「アート・コレクション」としてシリーズ化し、6本の展示を行った。	・周年や記念になる節目にあわせて、展示を企画することは広報的な効果も高く、今後もこうした観点でテーマ設定をする必要がある。 ・収蔵品の調査研究の成果を踏まえ、収蔵品を公開する場である常設展示を積極的に活用し、テーマ設定を工夫することによりリピーターの確保に努める。 ・魅力あるテーマを企画するには、収蔵品の調査研究に恒常的に取り組む必要がある。
			（３）展示に係る工夫 ・美術作品の展示においては、作品のみを展示するだけでなく、作品制作に関連する写真やスケッチはじめ、同時代の記録や歴史的資料類を併せて展示することで、多角的な視点での展示を行った。	・収蔵品の魅力発信のひとつとして、歴史や美術の分野を融合し、新たな観点で常設展を企画することに努めたい。
			（４）広報戦略・方法、ＳＮＳやＨＰなどによる情報発信の状況 ・引き続き、ＨＰやＳＮＳにより常に最新の情報が発信されるように取り組んだ。	・今後も継続していく。

	観覧者の満足度を向上させる館内環境の実現	６．ミュージアムの機能強化に向けた総合的リニューアルの検討	（１）検討状況 ・検討課題として下記の項目を挙げている。 ①学びの場としての展示室の検討 ②美術作品展示スペースの確保 ③来館者の安全性と利便性向上 ④障害者や高齢者等への対応 ⑤県民の恒常的空間としてのエントランス、ロビーの無料スペースの活用 ※④について、難聴者用磁気伝導ループシステムを導入。 また、令和３年度春の特別展準備として、手話動画を作成し、ホームページ上で公開した。	・県の財政状況も睨みながら総合的リニューアルの実施に向けて具体的な検討を継続して行っていきたい。 ・左記の①や⑤について、現状で出来る範囲で試行していきたい。
			（２）緊急を要する部分への対応 ・防犯カメラのシステムを更新した。 ・展示台の一部のクロス貼替を実施した。 ・展示室のクロス貼替や照明のLED化等の来館者サービスの面から展示機能の維持・強化が早急に必要な部分について、予算要求し、特別展示室の可動壁のメンテナンスのみ認められた（施工は令和３年度）。	・開館後20年が経過しているため、館内設備の老朽化が著しいが、緊急を要する箇所については予算要求を行い、早期の修繕・整備を行っていきたい。
	観覧者の満足度を向上させる館内環境の実現	７．瀬戸内海歴史民俗資料館の活用	（１）収蔵品を活用した展示の実施 ・テーマ展とは別に、中央ホールや休憩コーナーなど館内4か所の展示ケース等を利用して、1～4か月ごとに収蔵資料を展示替えをするなどして活用した。	・継続的に実施するとともに、ホームページ等でも紹介する。
			（２）展示方法の工夫 ・第1展示室～第8展示室の常設展示を再編し、テーマ設定や展示資料の入れ替えを行い、関連する映像も新たに8か所のモニターを増設した。	・外国人対応など、多言語化について準備していく必要がある。
			（３）他分野との協働による展示 ・第1展示室2階に瀬戸内ギャラリー(約100㎡)を開設し、「瀬戸内文化発信の場」として、瀬戸内、海、くらし、伝承、技、心、デザイン、自然、環境などをテーマに、館の自主企画だけでなく、外部の団体や個人等と連携・協働しながら総合的・分野横断的な企画展示を実施していくこととした。 ・昨年度に引き続き、県みどり保全課(ＮＰＯみんなでつくる自然史博物館)と共催でテーマ展「まちかど生き物標本展」を開催し、水辺や草原、森林の生き物について展示した。 ・県環境管理課と連携し、同課が推進する「里海大学」の講座に協力した。	・日頃からの外部との連携や情報収集に努めるとともに、持続可能な開催のための自主財源や外部資金の獲得が必要である。 ・順次、さまざまな生き物へと対象を広げたり、ため池などの「場」の設定を行うことにより、文理融合展示や効果的な歴民常設展示への取り込みなどを模索していく必要がある。 ・継続的な連携が必要である。

			（４）施設・設備の修繕 ・空調設備の更新と第1展示室特定天井の耐震化工事を行った。 ・第1展示室、休憩コーナー等の照明改善を行った。	・令和3年度も引き続き、機械室煙突耐震工事や来館者用トイレ1ヵ所の洋式化改修、第10展示室等の屋上防水工事を実施予定である。 ・来館者の安心・安全にかかる施設・設備の修繕等から優先的に要望し、続いて利便性の向上等についても改修要望をしていく予定である。
			（５）収蔵スペースの検討と対策 ・既存の収蔵庫の資料整理を行い、収蔵方法等の工夫により効率的な収納に努めた。	・今後は、県有未利用施設の状況を踏まえ、将来を見据えた本館分館一体的な対策を検討していく必要がある。